遠距離介護の試行錯誤　－テレビ電話で母をみる－

第８回（最終回）

家族の会会員　長坂　寿俊

［グループホームへ入所する］

2009 年９月４日、京都から新幹線と車を乗り継いで、昼過ぎにつくば市内のグループホームに到着、スタッフへの挨拶もそこそこに居室に入りました。「トイレに行きたい」と言うので場所を教えてしばらくすると様子が変です、シャワートイレの水で床が水浸しになっています、手で便座を押さえ続けたのでしょう。夕食後に行くと、またトイレを水浸しにしたそうです。「もう帰りたい」と言います。心配なので、夜８時ごろ様子を見に行きました。しかし、京都からの大移動で疲れたのでしょうか、寝巻に着替えてベッドでぐっすりと寝ていました。長い１日がようやく終わりました。

［グループホームでの生活］

グループホームでは週３回の入浴がありますが、最初は入浴拒否が激しく、スタッフに抵抗して、風呂にはなかなか入りません、それでも２週間ぐらいでだんだん入浴するようになりました。しかし、1 年たった現在でも、たまには拒否することがあります。そんな時は、入浴を無理に勧めないようスタッフにはお願いしています。

深夜にホーム内を徘徊したり、「帰りたい」と騒ぐこともあったようです。医師からは、これまでのアリセプトに加え、興奮を止め、心を落ち着かせる漢方薬も処方してもらうことになりました。

当初、困ったのは、イス、ゴミ入れ、整理ボックスなどを居室の入口につっかい棒として挟み込んで引戸を開かなくしてしまうことでした。誰かが部屋に入ってこないように戸締まりをしたつもりなのでしょう。京都での習慣はなかなか直りません。仕方がないので、イスなどつっかい棒に使われそうな物は家に持ち帰りました。

食事は、1 日 3 食をきちんと食べられるので助かります。これまでは一人暮らしで、昼はデイサービスで食べさせてもらいましたが、朝夕はいいかげん、食べたり食べなかったり、栄養も非常に片寄っていましたから。

面会は、ほぼ毎日、夕食後に行きます。

私「ご飯、食べたか？」、母「いま食べたとこや」、私「おかずは何やった？」、母「そんなもん忘れた」、私「ご飯はおいしかったか？」、母「そら、おいしいも何も、あるものを食べるだけや」、私「ここは楽やろ、朝昼晩とご飯を作ってくれるし、買い物にも行かんでええから」、母「楽や、茶碗も洗わんでええし、おかずもちゃんと誰かが注文して配達してくれてるし、お金は持ってないけどええのかな、お前が払ってるのか？」、私「ご飯代だけや、タダみたいなもんや」。

時々、母は「帰りたい」と言いますが、「家はいま改築工事中なので帰れない」と言うと、「それじ

ゃあ、工事が終わるまでここにいる」ということになります。母が「帰りたい」のは今まで何十年も住んでいた京都の父の実家ではなく、母が生まれ育った滋賀県の実家のことなのです。京都の記憶は何処かに行ってしまっています。まして、亡くなった父のことなどは一度も話題にも出てきません。母の頭の中は完全に少女時代に戻っているのでしょう。

母「おじいさん（母の父）、おばあさん（母の母）は元気か？」、私「今日も元気やった」、母「それは良かったなあ、もし病気で寝ていたら、見舞いに行かなあかんから」、母「千代子（母の妹）、重子（同）、文子（同）は学校から帰ってきたか？」、私「もう帰ってきた」、母「宿題はお前が見てるのか？」、私「そうや」、母「利雄（母の兄）、宗男（同）は生きてるか？」、私「まだみんな生きてる」、母「長生きやなあ」、母「みんなの食事代はお前が出してるのか？」、私「そうや」、母「みんなすこいなあ」、つじつまの合わない話ですが、会話を楽しんでいます。

居室では、壁から時計やカレンダーを外し、写真をはがしてクローゼットに隠したり、衣桁や洗面台の歯ブラシ、歯磨き、ヘアブラシ、コップなどを隠したり、テレビのコンセントやケーブル線を抜いたり、ベッドの敷布や布団、枕、寝間着をひもでくるんで整頓していることがよくあります。これらは問い詰めると「誰かがやった」と言うだけなので、気がつけば静かに元に戻しておきます。

母「帰る準備ができたから、いつでも帰れる」、私「今日は、まだ、ここに泊まれるよ」、母「そうか、いつまで居られる？　学校はもう終わるのとちがうか？　私はいま何年生や？」、私「まだ２年生やから、卒業まで４年は居られるよ」、母「まだ居てもええのか」

グループホームでは、習字をしたり、絵を描いたり、歌を歌ったりするので、学校だと思っているところもあるようです。それも、母の実家の近くの学校で、私も毎日、実家から面会に来ていると思い込んでいます。

［エピローグ］

グループホームでの生活も９月でちょうど１年が過ぎました。ブドウ狩り、クリスマスパーティ、夏祭り、家族会などの行事も経験し、母の様子も日々変化していますが、呆けても健康に暮らしているのが何よりです。この間、ホームのスタッフの皆さんには本当にお世話になっています。認知症との付合い方は、人それぞれで異なります。通算して４年間にわたる、初めての介護、遠距離介護からグループホームへの入所まで、これは私がたまたまやってみた事例にすぎません。これで８回の連載を終わりますが、介護に携わっておられる方々に、少しでも参考になれば大変うれしいことです。

終わり